ランボオ詩抄

中原中也譯

山本文庫 (17)

特263
588

始

特263
588

抄詩オボンラ

オボンラ

中原中也譯

山本書店版

目次

感動……一
フオーヌの頭……三
びつくりした奴等……五
谷間の睡眠者……七
わが放浪……九
蟠踞……一一
夕べの辭……一三
盜まれた心……一八
……二〇

醉ひどれ船……二三
虱捜す女……三五
母　音……三八
四行詩……四〇
鳥……四一
オフェリア……四四
音樂堂にて……四九
冬の思ひ……五四
いたづら好きの女……五六

感動

私はゆかう、夏の青き宵は
麥穗擽刺す小徑の上に、小草を蹈みに、
夢想家・私は私の足に、爽々しさのつたふを覺え、
吹く風に思ふさま、私の頭をなぶらすだらう！

私は語りも、考へもしまい、だが
果てなき愛は心の裡に、浮びも來よう
私は往かう、遠く遠くボヘミヤンのやう

天地の間を、女と伴れだつやうに幸福に。

フォーヌの頭

綠金に光る葉繁みの中に、
接唇(くちづけ)が眠る大きい花咲く
けぶるがやうな葉繁みの中に
活々として、佳き刺繍(ぬひとり)をだいなしにして

ふらふらフォーヌが二つの目を出し
その皓い齒で眞紅(まつか)な花を咬んでゐる。
古酒と血に染み、朱(あけ)に浸され、

その唇は笑ひに開く、枝々の下。

と、逃げ隠れた――まるで栗鼠、――
彼の笑ひはまだ葉に搖らぎ
鶯のゐて、沈思の森の金の接唇(くちづけ)
搔きさやがすを、われは見る。

びつくりした奴等

雪の中、濃霧の中の黑ン坊か
炎のみゆる氣孔の前に、
奴等車座(くるまざ)

跪づき、五人の小童(こわつぱ)――あなあはれ！――
ジッと見てゐる、麵麭屋が燒くのを
ふつくらとした金褐の麵麭、

奴等見てゐるその白い頑丈な腕が
粘粉(ねりこ)でつちて窯に入れるを
燃ゆる窯の穴の中。

奴等聽くのだいい麵麭の燒ける音。
ニタニタ顏の麵麭屋殿には
古い節(ふし)なぞ唄つてる。

奴等まるまり、身動きもせぬ、
眞ッ赤な氣孔の息吹(いぶき)の前に
胸かと熱い息吹の前に。

メディオノーシュ[1]に、
ブリオーシュ[2]にして
麵麭を賣り出すその時に、

煤けた大きい梁の下にて、
蟋蟀と、出來たての
麵麭の皮とが唄ふ時、

窯の息吹ぞ命を煽り、
襤褸の下にて奴等の心は
うつとりするのだ、此の上もなく、

奴等今更生甲斐感じる、
氷花に充ちた哀れな基督(エス)たち、
　どいつもこいつも

窯の格子に、鼻面(はなづら)くつつけ、
中に見えてる色んなものに
　ぶつくさつぶやく、

なんと阿呆らし奴等は祈る
霽れたる空の光の方へ
　ひどく體(からだ)を捩じ枉げて

それで奴等の股引は裂け
それで奴等の肌繻絆
　冬の風にはふるふのだ。

註　1 斷肉日の最終日にとる食事。
　　2 パンケーキの一種。

谷間の睡眠者

これは緑の窪、其處に小川は
銀のつづれを小草にひつかけ、
其處に陽は、矜りかな山の上から
顔を出す、泡立つ光の小さな谷間。

若い兵卒、口を開き、頭は露き出し
頸は露けき草に埋まり、
眠つてる、草ン中に倒れてゐるんだ雲の下、

蒼ざめて。陽光はそそぐ緑の寢床に。
兩足を、水仙菖に突っ込んで、眠つてる、微笑むで、
病兒の如く微笑んで、夢に入つてる。
自然よ、彼をあつためろ、彼は寒い！

いかな香氣も彼の鼻腔にひびきなく、
陽光の中にて彼眠る、片手を靜かな胸に置き、
見れば二つの血の孔が、右脇腹に開いてゐる。

わが放浪

私は出掛けた、手をポケットに突つ込んで。
半外套は申し分なし。
私は歩いた、夜天の下を、ミューズよ、私は忠僕でした。
さても私の夢みた愛の、なんと壯觀だつたこと！

獨特の、わがズボンには穴が開いてた。
小さな夢想家・わたくしは、道中韻をば捻つてた。
わが宿は、大熊星座。大熊星座の星々は、

やさしくささやきささめいてゐた。

そのささやきを路傍に、腰を下ろして聽いてゐた
あゝかの九月の宵々よ、酒かとばかり
額には、露の滴を感じてた。

幻想的な物影の、中で韻をば踏んでゐた、
擦り剝けた、私の靴のゴム紐を
堅琴みたいに彈きながら、足を胸まで突き上げて。

蟠踞

やがてして、足貴カロチュス、胃に不快を覺ゆるに、
軒窓に一眼ありて其れよりぞ
磨かれし大鍋ごとき陽の光
偏頭痛さへ惹起し、眼どろんとさせるにぞ、
そのでぶでぶのお腹をば布團の中にと運びます。

ごそごそと、灰色の布團の中で大騒ぎ、
獵物啖つたる年寄さながら驚いて、

ぼてぼての腹に膝をば當てまする。
なぜかなら、拳を壺の柄と枉げて、
肌着をばたつぷり腰までまくるため！

ところで彼氏蹲みます、寒がつて、足の指をばちぢかめて、
麺麭の黄を薄い硝子に被せかける
明るい日向にかぢかむで。
扨お人好し氏の鼻こそは假漆と光り、
肉出來の珊瑚樹かとも、射し入る陽光を厭ひます。

★

お人好し氏は漫火にあたる、腕拱み合せ、下唇をだらりと垂らし、

彼氏今にも火中に滑り、
ズボンを焦し、パイプは消ゆると感ずなり。
何か小鳥のやうなるものは、少しく動く
そのうららかなお腹でもつて、ちよいと臓物みたいなふうに！

四邊では、使ひ古るした家具等の睡り。
垢じみた襤褸の中にて、穢らはし壁の前にて、
腰掛や奇妙な寝椅子等、暗い四隅に
蹲まる。食器戸棚はあくどい慾に
滿ちた睡氣をのぞかせる歌手達の口を有つ。

いやな熱氣は手狹な部屋を立ち罩める。
お人好し氏の頭の中は、襤褸布で一杯で、
硬毛は濕つた皮膚の中にて、突つ張るやうで、
時あつて、猛烈可笑しいくさめも出れば、
がたがたの彼氏の寝椅子はゆれまする……

★

その宵彼氏のお臀のまはりに、月光が
光で出來た鑄物の接合線を作る時、よく見れば
入り組んだ影こそ蹲んだ彼氏にて、薔薇色の
雪の配景のその前に、たち葵かと……
面白や、空の奥まで、面はヴィーナス追つかける。

夕べの辭

私は坐りつきりだつた、理髪氏の手をせる天使そのままに、
丸溝のくつきり付いたビールのコップを手に持ちて、
下腹突き出し頸反らし陶土のパイプを口にして、
まるで平(たひら)とさへみえる、荒模様なる空の下。

古き鳩舍に煮えかへる鳥糞(うんこ)の如く、
數々の夢は私の胸に燃え、徐かに焦げて。
やがて私のやさしい心は、沈鬱にして生々(なまなま)し

溶(とろ)けた金のまみれつく液汁木質さながらだつた。

さて、夢を、細心もつて嚥み下し、
身を轉じ、――ビール三四十杯を飲んだので
尿意豫げんとこゝろをあつめる。

しとやかに、排香草(ピツプ)や杉にかこまれし天主の如く、
いよ高くいよ遐く、褐色の空には向けて放尿す、
――大いなる、ヘリオトロープにうべなはれ。

盗まれた心

私の悲しい心は船尾に行つて涎を垂らす、
私の心は安い煙草にむかついてゐる。
そしてスープの吐瀉を出す、
私の悲しい心は船尾に行つて涎を垂らす。
一緒になつてげらげら笑ふ
世間の駄洒落に打ちのめされて、
私の悲しい心は船尾に行つて垂を涎らす、
私の心は安い煙草にむかついてゐる！

諷刺詩流儀の雑兵氣質の
奴等の駄洒落が私を汚した！
舵の處には壁畫が見える
諷刺詩流儀の雑兵氣質の。
おゝ、玄妙不可思議の波浪よ、
私の心を浚ひ清めよ、
諷刺詩流儀の雑兵氣質の
奴等の駄洒落が私を汚した。

奴等の嚙煙草が盡きたとなつたら、
どうすれあいいのだ？　盗まれた心よ。

それこそ妙な具合であらうよ、
奴等の煙草が盡きたとなつたら、
私のお腹は跳び上るだらう、
それで心は奪回せるにしても。
奴等の嚙煙草が盡きたとなつたら、
どうすれあいいのだ？　盜まれた心よ。

醉ひどれ船

私は不感な河を下つて行つたのだが、
何時しか私の曳船人等は、私を離れてゐるのであつた、
みれば罵り喚く赤肌人等が、彼等を的にと引ッ捕へ、
色とりどりの棒杭に裸かのままで釘附けてゐた。

私は一行の者、フラマンの小麥や英綿の荷役には
とんと頓著してゐなかつた
曳船人等とその騷ぎとが、私を去つてしまつてからは

河は私の思ふまま下らせてくれるのであつた。

私は浪の狂へる中を、さる冬のこと
子供の脳より顰乎として漂つたことがあつたつけが！
怒濤を繞らす半島と雖も
その時程の動乱を蒙けたためしはないのであつた。

嵐は私の海上に於ける警戒ぶりを讃歎した。
浮子よりももつと輕々私は浪間に躍つてゐた
犧牲者達を永遠にまろばすといふ浪の間に
幾夜ともなく船尾の燈に目の疲れるのも氣に懸けず。

子供が食べる酸い林檎よりもしむみりと、
緑の水はわが樅の船體に滲むことだらう
又安酒や嘔吐の汚點は、舵も錨も失せた私に
無暗矢鱈に降りかかつた

その時からだ、私は海の歌に浴した
星を鏤め乳汁のやうな海の、
生々しくも吃水線は蒼ぐもる緑の空に見入つてあれば
折から一人の水死人、思ひ深げに下つてゆく、
其處に忽ち蒼然色は染め出され、おどろしく

またゆるゆると陽のかぎろひのその下を、
アルコールよりもなほ強く、堅琴よりも渺茫と、
愛執のにがい茶色も漂つた！

私は知つてゐる稲妻に裂かれる空を龍卷を
打返す浪を潮流を。私は夕べを知つてゐる、
群れ立つ鳩にのぼせたやうな曙光を、
又人々が見たやうな氣のするものを現に見た。

不可思議の畏怖に染みた落日が
紫の長い凝結を照らすのは

古代の劇の俳優か、
大浪は遠くにはためき逆卷いてゐる。

私は夢みた、眩いばかり雪降り積つた綠の夜を
接唇は海の上にゆらりゆらりと立昇り、
未聞の生氣は循還し
歌ふがやうな燐光は青に黃色にあざやいだ。

私は從つた、幾月も幾月も、ヒステリックな
牛小舍に似た大浪が暗礁を突擊するのに、
もしもかの光り耀ふマリアの御足が

お望みとあらば太洋に猿轡かませ給ふも儘なのを氣が付かないで。

船は衝突つた、世に不可思議なフロリダ州
人の肌膚の豹の目は叢なす花にいりまじり、
手綱の如く張りつめた虹は遙かの沖の方
海綠色の畜群に、いりまざる。

私は見た、沼かと紛ふ巨大な魚梁が沸き返るのを
其處にレヴィヤタンの一族は草に絡まり腐りゆき、
凪の中心に海水は流れいそぎ
遠方は淵を目がけて瀧となる！

氷河、白銀の太陽、眞珠の波、燠の空、
褐色の入江の底にぞつとする破船の殘骸、
其處に大きな蛇は虫にくはれて
くねくねの木々の枝よりどす黑い臭氣をあげては墮ちてゐた！

子供等に見せたかつたよ、碧波に浮いてゐる鯛、
其の他金色の魚、歌ふ魚、
瀛の花は私の漂流を祝福し、
えもいへぬ風は折々私を煽てた。

時として地極と地帶に飽き果てた殉教者・海は

その歔欷でもつて私をあやし、
黄色い吸口のある仄暗い花をばかざした
その時私は膝つく女のやうであつた

半島はわが船近く搖らぎつつ金褐の目の
怪鳥の糞と爭ひを振り落とす、
かくてまた漂ひゆけば、わが細綱を横切つて
水死人の幾人か後方にと流れて行つた……

私としてからが浦々の亂れた髪に踏み迷ひ
鳥も棲まはぬ氣圏までも颶風によつて投げられたらば

海防艦もハンザの船も
水に醉つた私の屍骸を救つてくれはしないであらう、

思ひのままに、煙吹き、紫色の霧立てて、
私は、詩人等に美味しいジャミや、
太陽の蘇苔や青空の鼻涕を吳れる
壁のやうに赤らんだ空の中をずんずん進んだ、

電氣と閃く星を著け、
黑い海馬に衞られて、狂へる小舟は走つてゐた、
七月が、丸太ン棒で打つかとばかり

燃える漏斗のかたちした紺青の空を搖るがせた時、

私は慄へてゐた、五十里の彼方にて
べへモと渦潮の發情の氣色がすると、
ああ永遠に、青き不動を紡ぐ海よ、
昔ながらの欄干に倚る歐羅巴が私は戀しいよ。

私は見た！　天にある群島を！　その島々の
狂ほしいまでのその空は漂流ふ者に開放されてた、
底知れぬこんな夜々には眠つてゐるのか、もう居ないのか
おゝ、百萬の金の鳥、當來の精力よ！

だが、惟へば私は哭き過ぎた。曙は胸抉り、
月はおどろしく陽はにがかつた。
どぎつい愛は心蕩かす失神で私をひどく緊めつけた。
おゝ！　龍骨も碎けるがよい、私は海に沒してしまはう！

よし今私が歐羅巴の水を望むとしても、それははや
黑い冷たい林の中の潴水で、其處に風薫る夕まぐれ
子供は蹲んで悲しみで一杯になつて、放つのだ
五月の蝶かといたいけな笹小舟。

あゝ浪よ、ひとたびおまへの倦怠にたゆたつては、

綿船の水脈ひく跡を奪ひもならず、
旗と炎の驕慢を横切りもならず、
船橋の、恐ろしい眼の下をかいくぐることも、出來ないこつた。

虱搜す女

嬰兒の額が、赤い憤氣に充ちて來て、
なんとなく、夢の眞白の群がりを乞ふてゐるとき、
美しい二人の處女は、その臥床邊に現れる、
細指の、その爪は白銀の色をしてゐる。

花々の亂れに青い風あたる大きな窓邊に、
二人はその子を坐らせる、そして
露滴くふさふさのその子の髪に

無氣味なほども美しい細い指をばさまよはす。

さて子供は聽く氣づかはしげな薔薇色のしめやかな蜜の匂ひの
するやうな二人の息が、うたふのを
唇にうかぶ唾液か接唇を求める慾か
ともすればそのうたは杜切れたりする。

子供は感じる處女らの黑い睫毛がにほやかな霧氣の中で
まばたくを、また敏捷いやさ指が、
鈍色の懶怠の裡に、あでやかな爪の間で
虱を潰す音を聞く。

たちまちに懶怠の酒は子供の腦にのぼりくる、
有頂天になりもやせんハモニカの溜息か。
子供は感ずる、ゆるやかな愛撫につれて、
絶え間なく泣きたい氣持が絶え間なく消長するのを。

母音

Aは黑、Eは白、Iは赤、Uは綠、Oは赤、母音たち、
おまへたちの穩密な誕生をいつの日か私は語らう。
A、眩ゆいやうな蠅たちの毛むくぢやらの黑い胸衣(むなぎ)は
むごたらしい惡臭の周圍を飛びまはる、暗い入江。

E、蒸氣や天幕(テント)のはたゝめき、誇りかに
槍の形をした氷塊、眞白の諸王、繖形花顫動、

I、緋色の布、飛散(とばち)つた血、怒りやまた
熱烈な悔悛に於けるみごとな笑ひ。

U、循環期、鮮綠の海の聖なる身慄ひ、
動物散在する牧養地の靜けさ、錬金術が
學者の額に刻み付けた皺の靜けさ。

O、至上な喇叭の異樣にも突裂(つんざ)く叫び、
人の世と天使の世界を貫ぬく沈默、
——その目紫の光を放つ、物の終末！

四行詩

星は汝が耳の核心に薔薇色に沸き、
無限は汝が頸より腰にかけてぞ眞白に巡る、
海は朱き汝が乳房を褐色の眞珠とはなし、
して人は黑き血ながす至高の汝が脇腹の上……

烏

神よ、牧場が寒い時、
さびれすがれた村々に
御告の鐘も鳴りやんで
見渡すかぎり花もない時、
高い空から降ろして下さい
あのなつかしい烏たち。
嚴しい叫びの奇妙な部隊よ、

木枯は、君等の巣を襲撃し！
君等黄ばんだ河添ひに、
古い十字架立つてる路に、
溝に窪地に、
飛び散れよ、あざ嗤へ！

幾千ともなくフランスの野に
昨日の死者が眠れる其處に、
冬よ、ゆつくりとどまるがよい、
通行人等がしむみりせんため！
君等義務の叫び手となれ、

おゝわが喪服の鳥たちよ！

だが、あゝ御空の聖人たちよ、夕暮迫る檣のやうな
槲の高みにゐる御身たち、
五月の頬白見逃してやれよ
あれら森の深みに繋がれ、
出ること叶はず草地に縛られ、
しようこともない輩のため！

オフェリア

I

星眠る暗く靜かな浪の上、
蒼白のオフェリア漂ふ、大百合か、
漂ふ、いともゆるやかに長き面帕に横たはり。
遐くの森では鳴つてます鹿逐詰めし合圖の笛。

以來千年以上です眞白の眞白の妖怪の
哀しい哀しいオフェリアが、其處な流れを過ぎてから。

以來千年以上ですその戀ゆゑの狂ひ女が
そのロマンスを夕風に、呟いてから。

風は彼女の胸を撫で、水にしづかにゆらめける
彼女の大きい面帕を花冠のやうにひろげます。
柳は慄へてその肩に熱い涙を落とします。
夢みる大きな額の上に蘆が傾きかかります。

傷つけられた睡蓮たちは彼女を圍繞き溜息します。
彼女は時々覺ます、睡つてゐる榛の
中の何かの塒をば、すると小さな羽ばたきがそこから逃れて出てゆ

きます。
不思議な一つの歌聲が金の星から墮ちてきます。

II

雪の如くも美しい、おゝ蒼ざめたオフェリアよ、
さうだ、おまへは死んだのだ、暗い流れに運ばれて！
それといふのもノルエーの高い山から吹く風が
おまへの耳にひそひそと酷い白由を吹込んだため。

それといふのもおまへの髪毛に、押寄せた風の一吹が、
おまへの夢みる心には、ただならぬ音とも聞こえたがため。

それといふのも樹の嘆かひに、夜毎の闇の吐く溜息に、
おまへの心は天地の聲を、聞き落すこともなかつたゆゑに。

それといふのも潮の音が、さても巨いな殘喘のごと、
情けにあつい子供のやうな、おまへの胸を痛めたがため。
それといふのも四月の朝に、美々しい一人の蒼ざめた騎手、
哀れな狂者がおまへの膝に、默つて坐りにやつて來たため。

何たる夢想ぞ、狂ひし女よ、天國、愛戀、自由とや、おゝ！
おまへは雪の火に於るがごと、彼に心も打靡かせた。
おまへの見事な幻想はおまへの誓ひを責めさいなんだ。

——そして無殘な無限の奴は、おまへの瞳を震駭させた。

Ⅲ

扨詩人奴が云ふことに、星の光をたよりにて、
嘗ておまへの摘んだ花を、夜毎おまへは探しに來ると。
又彼は云ふ、流れの上に、長い面帕に横たはり、
眞ッ白白のオフェリアが、大きな百合かと漂つてゐたと。

音樂堂にて

シャルルギル・ガアルの廣場

貧弱な芝地になつてる廣場の上に、
木も花も、何もかもこぢんまりした辻公園に、
暑さにうだつた市民たち、毎木曜日の夕べになると、
戀々と、愚鈍を提げて集つて來る。

軍樂隊は、その中央で、
ファイフのワルツの演奏中、頻りに軍帽を振つてゐる。
それを圍繞く人群の前の方には氣取屋連が得意げで、

公證人氏は安ピカの、頭字入りのメタルに見入つてゐる際中。

鼻眼鏡の金利生活先生達は、奏樂の、調子の外れを氣にします。

無暗に太つた勤人等は、太つた妻君連れてゐる、

彼女の側に行きますは、いと世話好きの先生達、

彼女の着物の裾飾と來ちや、物欲しさうに見えてます。

隱居仕事に、食料を商る連中の何時も集る綠のベンチ、

今日も彼等はステッキで砂を搔き搔き大眞面目

何か契約上のこと、論議し合つてゐるのです、

何れお金のことでせう、扨『結局……』と云つてます。

お尻の丸味を床几の上に、どつかと据えてるブルジョワは、

はでな釦を附けてゐるビール腹したフラマン人、

オネン・パイプを嗜んでゐる、ボロリボロリと煙草はこぼれる、

——ねえ、ホラ、あれは、密輸の煙草！

芝生の緣では無賴漢共が、さかんに冷嘲してゐます。

トロンボオンの節につれ、甘アくなつた純心の

いとも氣隨な兵隊達は、子守女と口をきかうと

まづその抱いてる赤ン坊をあやします。

——私は學生よろしくの、身裝くづした態なんです、」

綠々としたマロニエの、下にははしこい娘達、
彼女等私をよく知つてゐて、笑つて振向いたりします
その眼付にはいやらしい、要素も相當あるのです。

私は默つてゐるのです、私はジッと眺めてる
髪束が風情をあたへる彼女等の、白い頸。
彼女等の、胴衣と華車な裝飾の下には、
肩の曲線に打つづく聖らの背中があるのです。

彼女等の靴も私はよく見ます、靴下だつてよく見ます。
扨美しい熱もゆる、全身像を更めて、私は胸に描きます。

彼女等私を嗤ひます、そして低聲で話し合ふ。
すると私は唇に、寄せ來る接唇を感じます。

〔一八七〇、八月〕

冬の思ひ

かの女に

僕等冬には薔薇色の、車に乗つて行きませう
　中には青のクッションが、一杯の。
僕等仲良くするでせう。とりとめもない接唇の、
　巣はやはらかな車の隅々。

あなたは目をば閉じるでせう、窓から見える夕闇を
　その顰め面を見まいとて、
かの意地悪い異常さを、鬼畜の如き

愚民等を見まいとて。

あなたは頬を引ッ掻かれたとおもふでせう。
接唇(くちづけ)が、ちよろりと、狂つた蜘蛛のやうに、
　あなたの頸を走るでせうから。

あなたは僕に云ふでせう、『探して』と、頭かしげて、
僕等蜘蛛奴(あ)を探すには、隨分時間がかゝるでせう、
　――そいつは、よつぽど驅けまはるから。

一八七〇、十月七日、車中にて。

いたづら好きな女

ワニスと果物の匂ひのする、
褐色の食堂の中に、思ふ存分
名も知れぬベルギー料理を皿に盛り、
私はひどく大きい椅子に埋まつてゐた。

食べながら、大時計の音を聞き、好い氣持でジッとしてゐた。
サッとばかりに料理場の扉が開くと、
女中が出て來た、何事だらう、

とにかく下手な襟掛をして、ベルギー・レースを冠つてゐる。

そして小さな顫へる指で、
桃の肌えのその頰を絶えずさはつて、
子供のやうなその口はとンがらせてゐる、

彼女は幾つも私の近くに、皿を竝べて私に媚びる。
それからこんなに、——接唇してくれと云はんばかりに——
小さな聲で『ねえ、あたし頰に風邪引いちやつてよ……』

シャルルロワにて、一八七〇、十月。

昭和十一年六月二十日印刷
昭和十一年六月二十五日刊行

山本文庫
17

ランボオ詩抄
定價拾錢

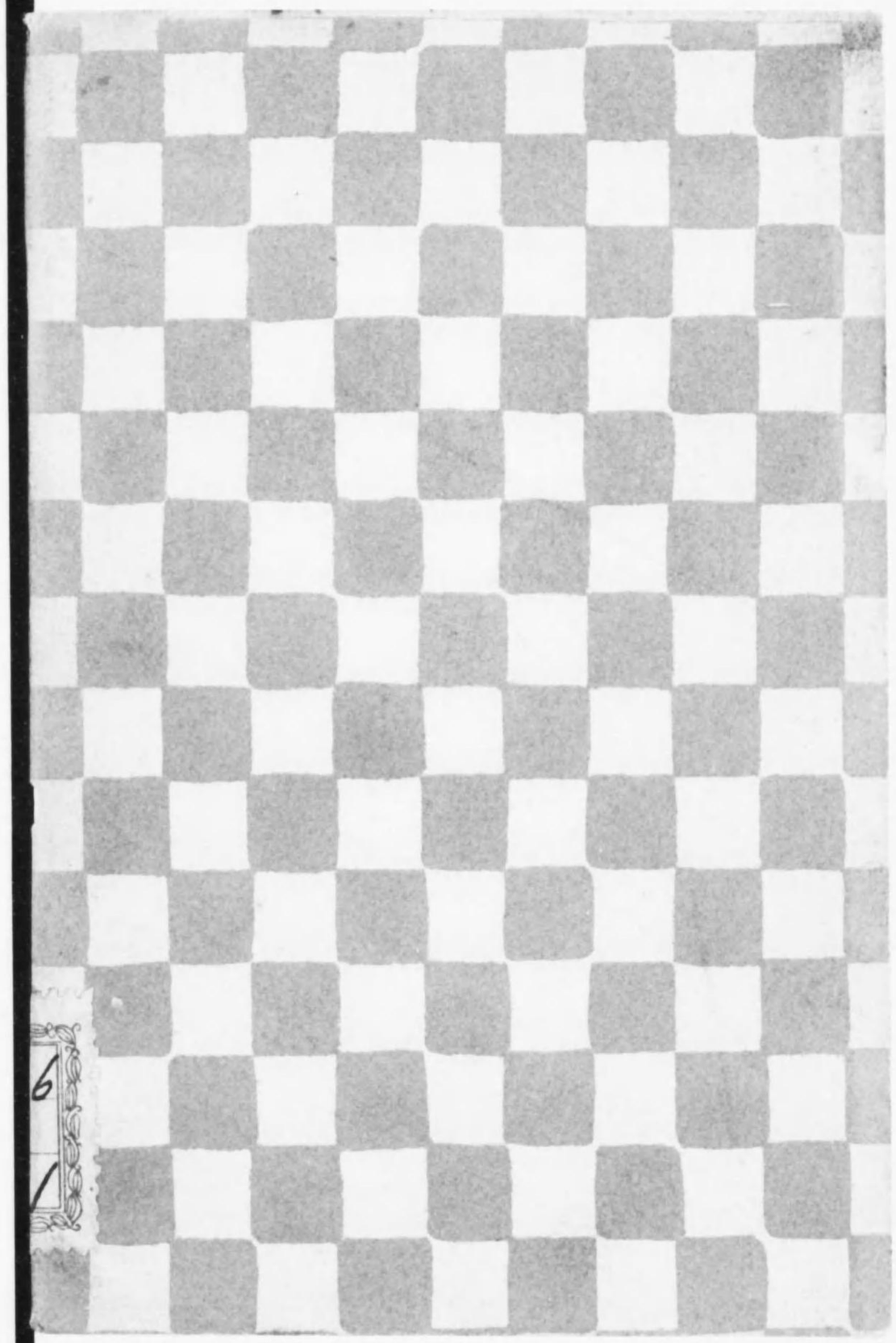
譯者　中原中也
發行者　山本武夫　東京市牛込區矢來町七〇
印刷者　山田兼次郎　東京市牛込區岩戸町一七
發行所　山本書店　東京市牛込區矢來町七〇　振替東京七四八六七番

ランボオ

ジャック・リヴイエール著　辻野久憲譯

六百部限定番號入　定價一・五〇　送・一二

この書の譯者辻野久憲君は、人間性の究極的純潔を愛することで、また絶對アナアキイの思想的理念を持つてゐることで、ランボオと一部通ずるところのある青年である。この好譯者の書物を通じて、日本の若き詩人たちが僕と同じくランボオを知り、世界の驚異と言はれる天才の魂にまで、新しく接觸されんことを希望する。ランボオの譯詩を讀んで、今迄僕と同じく彼を不可解の迷語と考へ、地球圏外に敬遠して居た人々も、この書によつて始めて理解の鍵を得ることであらう。（萩原朔太郎氏）

青年文學者への忠言　ボオドレエル　中島健蔵譯　1
小散文詩　ボオドレエル　三好達治譯　2
地の糧抄　ジイド　辻野久憲譯　3
アリサの日記　ジイド　山内義雄譯　4
青春　ジイド　今日出海譯　5
ゲーテの言葉　石中象治譯　6
從軍日記（カロッサ）　片山敏彦　竹山道雄譯　7
謝肉祭　ハウプトマン　大野俊一譯　8
眞珠孃　モオパッサン　岸田國士譯　9
ヴェニス物語　レニエ　草野貞之譯　10
ソグーブ大尉のお茶　ケッセル　青柳瑞穂譯　11
田園詩　トルストイ　平井肇譯　12
小鳥の英文學　ジエフリズ他　戸川秋骨譯　13
百花村物語　佐藤春夫譯　14
愛人への手紙　チエホフ　勘解芳子譯　15
ロオレンスの手紙　織田正信譯　16
ランボオ詩抄　中原中也譯　17
アムステルダムの水夫　アポリネエル　堀辰雄譯　18
ドニイズ・花賣娘　ラディゲ　堀口大學譯　19
蜜月・幸福　マンスフイルド　平田禿木譯　20
エピキユルの園　フランス　草野貞之譯　以下七月上旬刊行
博物誌抄　ルナアル　岸田國士譯
ボオ論　ボードレエル　小林秀雄譯
戀する人々　リルケ　茅野蕭々譯
獅子狩　フロイツプ　堀口大學譯
ツアラトウストラ抄　ニーチエ　登張竹風譯
病中日記　ドストエフスキ　中山省三郎譯
千載一遇　ゼーム　平田禿木譯
雄鷄とアルルカン　コクトオ　佐藤朔譯
乙女らは何を夢見るか　ミユツセ　戸川エマ譯

終